

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子 絵画修復家

久しぶりにこのコラムを書いていきます。今日は何を書こうかな、と思いを巡らしているうちに、「体質」という言葉が浮かんできました。絵画や、修復などという仕事にかかわり始めて以来ずっと、この言葉については考えてきたもので、少し書いてみたいと思います。

「体質」という言葉でまず私自身が思いつくのは、マネリスムの時代に生きた画家、ポントルモのデッサンについてです。彼の描く素描は、線が美しく、た

おやかで、そしてマネリスムの典型として、引き伸ばされて不自然に細長い人物像が多い事が特徴です。このポントルモの素描に出会ったのは、私がムサビに入ったばかりの頃でした。その頃、というより今もあるのかもしれないけど、ムサビには風月という恐ろしく不衛生で不味くて、しかし安い！ので、学生に人気の(?)学食があつて、その学食を出たところでは、時折業者が学生のための、参考書や画集などを持ち込んで展示即売をやっていました。そしてその中には、5万円近い値段の分厚い豪華本でミケランジェロの素描集も置かれていました。

私には、自分のデッサンが全くもって下手なことにはかなり悩んでいました。そして、青木繁の木炭デッサンの画集もすぐいけれど、西洋の、曲線で筋肉を現してゆく方法、その繊細な線の集積について本当に美しいと思ひ、業者が来ると、財布の中には500円だつて入ってはいなかったのに、「しっしっ」と追い払われ

たので顔見知りが多く、しかもムサビの向かいの中華店でバイトをやつていて、毎日昼のまかないご飯が絶対的にギョーザだったので、すっかり辟易して、いつまでもあまったギョーザを皆に差し入れるものだから、大学の係りのおじさんたちとは大の仲良しでした。」「ミケランジェロの画集だつたら大学の図書館にあるはずだよ、図書館に聞いてあげよう。」

それから私は毎日授業がない時間は図書館に居座るようになった。こうした豪華な本は貸し出しはしてくれないので、しかも模写もコピーとするのもだめなので、とにかく食い入る様に一枚一枚のページを見つめるしかない。

ミケランジェロの素描は、しつこいほどの筋肉のうねりが、線の凝縮した緊張の波が続く。すごいなーすごいな……ん

……でも、同時に私は違和感も覚えていた。すごいけど、私の中にこれを受け付けない何かも腹の底にあるみたいだ。何だろう、どうしてだろう、おかしい。……訳が分からないので、何かこの時代の、他の画家のデッサンを見てみよう。自分はどう感じるのだろう……。と、探し始めてすぐ図書館の中に一冊のポントルモの画集を見つけたのです。(彼の作品は、普通は色鮮やかなフレスコ画の作品を紹介する的多いと思うが、この時、私が見つけたのは白黒の、それは綺麗な印刷のデッサン集だった。)衝撃を受けた。これは……。

ミケランジェロと同じように、線の集積によつて、ハッチングによつて、筋肉があらわされている。しかしこのデッサンは確かに巨匠の作品と比べて弱々しいのだけれど、それでも並外れたエレガントな線、調和の取れたトーンがあつて、自分がミケランジェロに違和感があつたのは、たぶんその溢れんばかりの精力的な……むせ返るような男性的な部分なのだと思ひがついた。私自身の体質としては、ミケランジェロの素描の確かさを併せ持ち、かつ、もう少し柔らかで繊細なタツ

チの画家はいないだろうかと思つてしまつたのだ。人間が行う芸術とは、その人間の中に内在されているその人の体質によつて決まってくるものが(また、このことが真の芸術また垂流をも生むのだということも)この時ようやく理解できました。ミケランジェロはそのたくましい肉体と活

力で長時間に渡つて、滑車をつけた台に仰向けになつて天井画を描いた、という話が残っている人物だが、それに対してポントルモは、ベスト感染を恐れてかもしれないが、異常に人に会うことを嫌い、部屋の梯子を上るとその梯子を上げてしまった、などという逸話や、彼の残した日記が、ほとんどすべてがその日に食した物についてと、瀉血(当時は具合が悪いと血が汚れているためと思われていて、過剰なほど体から血を抜くという荒っぽい健康法が信じられていた。)を行つたという健康についてのことばかり書いてある、とい

うかなり神経症的な代物で、ミケランジェロとの体質の違いを強く感じさせる。私には、こうした両者の氣質、体質的な違いが決定的に画風を作り出していること、それでは果たして自分の体質(氣質も含めて)はどんなもので、どういう方向性の作品を作る力が本来内在されているのだろうと言う事を意識した。無理をせずにこうした自分の内部に素直に沿つて、しかしその内部をしなやかに、改革または改善または研ぎ澄ますことを自分に課してゆくことが、自分の芸術に對的なことだと思つた。



ポントルモの作品

しかし、この作業はあまり易しいものではない。自分の閉じられた箱の蓋を開けてみると、本来見つけるべき自分の核はすぐには全然見えてこない。母親から甘やかされて出来た厚ぼつたい皮、いじけて干からびた皮、硬くて丈夫な劣等感という皮や負けん気という苦い皮。色々な事柄でキャベツみたいにびっしり自分が形成されてしまつていて、そいつを研ぎ澄ますのは、至難の業なのだ。そんな腺病的な体質の自分だが、とりあえず「いと高きところに」という言葉に要約されるような精神に、どんな弱い体質であつても、「正の気を帯びた」質であれば、そこから発せられた線はないがしろには出来ない、と信じてきた。

そして今も、修復のためにやつて来た絵や何処かで出合う作品について、本能的にそうした体質を見極めようとする癖がついてしまつている。世の中には、色々な絵が存在する。いわゆるプロの絵、アマの絵、飾つて綺麗な絵、どろどろした絵、成功した画家の絵、二束三文の絵……etc.

理由で画商の言いなりに花や太陽をひとつ描き加えちゃつたりする画家。海外でも日本でも私は色々な画家に遭つてきた。その度に私はその人たちの体質をじつと見つめてしまつていた。ボザール(パリ国立美大)で出会つたあの有名なクレモニーニは、声も大きく精神的で、自分の信念が強いだけに生徒の作品も疑似クレモニーニ状態になつていった。それだけ、学生に人気もあつたし、影響力がある、と言う事だけれど。私はデッサン科に所属していたが、デッサン以外の油彩の作品は、無理やり違う教室の、キャロンという先生に教えを受けていた。彼も当時はクレモニーニほどではないにしろ、ヨーロッパでは著名な画家の一人だつた。彼はどちらかというとポントルモ風の人で、教室の中でもひとつ自力で部屋を作り、そこに閉じこもつて自分の制作ばかりしていた。だからあまり生徒のことは教えない。話すときはひそひそ声で話す。ボザールにいて、私はムサビを出てからもう一度大学に入った訳で、周りの学生の作品が単なる学生の絵でしかないことに段々に焦りを覚え始めていた。私は